

Curation for relativization of the negative history :
The exhibition of the picture postcard in Iizaka
Spa in Fukushima city

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 幸治 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/579

負の歴史を相対化するキュレーション

—— 飯坂温泉における絵はがきの展覧会の実践から ——

加藤 幸治

はじめに

いま、絵はがきが「おもしろい」。これまで古い絵はがきは、もっぱら古物を漁る骨董趣味の具として消費されてきた。市場では、人気のモチーフのものは獲得競争によって高価で取引される一方、大半の絵はがきはゴミ同然の扱いである。最初に「おもしろい」と表現したのは、この商品にもならないようなものが、ある意味づけをすることによって交流の場を生みだしたり、人々の価値観を少しだけ変えたりすることがあるという「おもしろさ」である。

絵はがきの多くは写真を印刷したものである。写真は単に図像として写り込んでいるものに価値があるのではない。そこには撮る側の主観が常に介在しており、写真は写真行為の過程の痕跡として存在する（註1）。視覚文化の観点から見れば、絵はがきは自己／他者表象の最前線へと私たちを誘うのである。

現在、蒲倉綾子氏（二〇一二年度本学歴史学科卒業生）を代表とする飯坂絵はがきプロジェクトと筆者は、福島県の飯坂温泉をフィールドに戦前から売春防止法が施行される前後の昭和三〇年代初期までを対象に、資料収集と調査研究、そして現地での文化創造活動に取り組んでいる（註2）。上記の時代を再考する交流空間の創出、そしてそこでの交流から過去を位置づけなおすための対話を生み出す仕掛けとして、地域の多様なアクターとの協働による展覧会といくつかの企画を地域で実践し始めている。本稿は、ビジュアル・メディアを道具として用いた新たなフィールドワークの可能性を拓く方法的実験として、現在取り組んでいる実践について報告するものである。

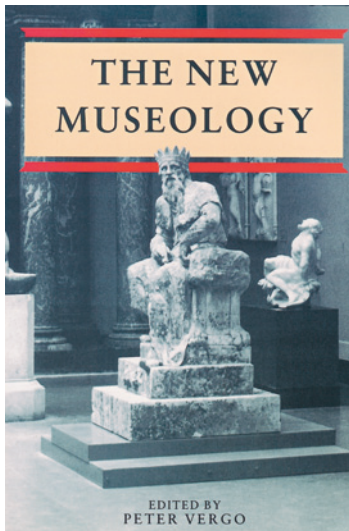
1. ニュー・ミュージオロジー以降のフィールドワークの転換

現在進めている、飯坂温泉でのビジュアル・メディアを用いた地域への介入という調査方法の基礎には、近年のニュー・ミュージオロジーの様々な実践に対する筆者自身の共鳴がある。これはピーター・ヴァーゴの『ニュー・ミュージオロジー』や博物館の特権性の脱構築に対する議論により（註3）、博物館展示にまつわる政治性の問い直しが不可欠な

ものとなるなかで提案されてきた、新しい博物館像のひとつである。博物館は、選択／排除の価値判断の総和としてのコレクションを形成し、歴史や文化を展示として表象する装置である。そこには社会の多様な価値の尊重や、多文化主義的な文化創造空間の創出といった現代社会からの要求としばしば齟齬をきたす。議論はさらに進展し、例えばシャロン・マクドナルドとゴードン・ファイフ『博物館の理論を立てる』（註4）では、グローバル化の進展のなかで博物館という現場が記憶や文化遺産、表象をめぐるせめぎあいの最前線であるとし、博物館そのものをフィールドと位置付け、人類学者、社会学者らが様々な議論を展開している。

この議論においては、博物館はもはや歴史的遺産のストレージとして存在することすら許されず、多数派が作り出す価値の検証や、科学の問い直し、市民による文化創造の空間として、不断に同時代を生きる人々との交流を生み出す装置として機能することが求められる。これについて吉田憲司は「博物館を単に過去のモノの貯蔵庫や一方的な表象の装置としてではなく、そこに立場を異にするさまざまな人びと、さまざまな機関が集い、相互の交流と啓発を重ねる中で、過去の文化を創造的に継承し、新たな文化と社会を構築する装置として活用すること。いわば、博物館をめぐる人と機関のネットワークを通じて、新たな世界を作り上げること。すでに、博物館は、地球規模で、その方向へと動き出している」（吉田二〇一三、二一九～二二〇頁）と述べ、その枠組みは実践のなかで構築されるべきと主張している。

筆者はこれまで、民具や写真を含む広義のモノからのアプローチをベースに、人々の生活や人々の行動の背景について考える民俗学に取り組んできた。フィールドを策定し、聞き書きや参与観察のなかから問題発見をし、人々の生活や行動の文脈を記述しうるデータの収集と技術や知識を内包したモノの集積を行い、それらの総合化によって民俗誌や展示という表象行為を行うのがセオリーであった。



しかし、ニュー・ミュージオロジー以降の動きを踏まえると、もはやフィールドは資料の収集やデータの集積の場として、表象の現場と分離しえない。むしろ調査の営みそのものが、地域の種々のアクターとの対話と協働を不可欠とし、その表象も地域社会における様々な動きとの関係においてしか存在しえなくなる。さらに表象された地域像が、地域社会や住民にインパクトを与え、認識の変化を促す場合もある。地域経済の構造的な変化や災害など、ドラスティックな変化が起こったときに、調査データが当初の研究の文脈とは全く異なる文脈に位置付けられ、意味を獲得する場合や、特定のモノが何かの象徴として唐突に文化資源化され、いびつなキャラク

ターやご当地名物が創作される場合もある。生活や記憶という、人々の最も身近なものを掘り起こす民俗調査という行為は、調査そのものが地域の現在進行形の状況のなかに否応なしに位置付けられ、学問のまなざしの不断の問い直しを求められるのである。

もともと民俗調査は、民俗資料という素材を介した価値掘り起こしのプロジェクトとしての性格を多かれ少なかれ持っており、調査者と話者がともに営む価値創造的な実践である。その営みは、地域における価値創造の実践を促す契機があるならば、民俗学者がフィールドワークを通じてそこにコミットしていくのは必然ではないだろうか。

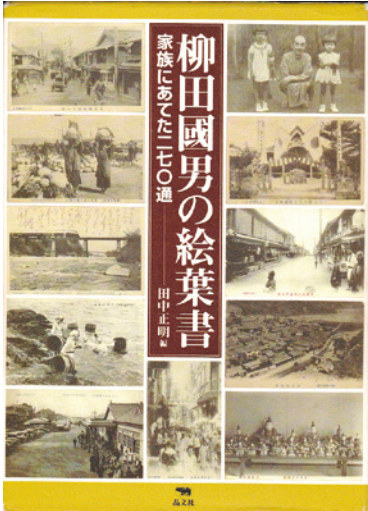
こうした考えのもと、筆者はかつて地域博物館の学芸員として住民参加による様々なプロジェクトを実践してきた(註4)。しかし近年は、地域の実践を博物館活動にフィードバックさせるのではなく、むしろフィールドワークによる調査の現場そのものが博物館活動の空間であると考えている。地域の人々ともに作り上げる移動博物館活動のなかから、価値創造の空間を生み出していくようなフィールドワークのかたちは、東日本大震災の被災地での文化財レスキュー活動の一環で行っている移動博物館(註5)における筆者の最大の課題である。本稿で紹介する飯坂温泉での絵はがきとその展示を通じたフィールドワークも、新たなフィールドワークの方法の実験である。

2. 文化資源としての絵はがき

2-1 絵はがきの資料的価値

ところで絵はがきとはどのような資料であろうか。そもそも近代的な郵便制度のなかで、はがきは勝手に作成してはならないものであった。それが明治33年になって規制緩和が行われ、“私製はがき”の使用が認められたことにより、観光地の風景や名所を題材とした絵はがきが、全国各地で作られた。絵はがきは新たな広告メディアとしての性格を強く持ちながら、社会に浸透していった。特に、日露戦争など戦地の状況を生々しく伝える報道メディアとして、絵はがきは国民を駆り立てる機能を担った。また、様々なイベントや博覧会の絵はがきや、芸妓のグラビアなど、多くの絵はがきが出版された大正～昭和前期は、絵はがきの全盛期と見ることもできる(註6)。

こうした特定の時代背景のもと登場した絵はがきは、歴史研究の資料という観点においては厄介な代物である。絵はがきは、発行年が記されていないものがほとんどで、製作の背景を知る手がかりも少ない。そもそも写真が撮影されてから絵はがきとして出版されるまでのタイムラグが存在し、かつ大量に複製されるためオリジナル性をつかめず、文献学的には二次史料のなかでも史料的条件に乏しいものといえる。図像そのものは文献等では明らかにならない多くの情報を提供してくれる。また、人々の行動も映り込んでいれば庶民生活の資料たりうる場合がある。こうした建築史また風俗史の意義は認めつつも、多くの絵はがきがある意図を持って切り取られ、広い意味での展示としての側面もあること



から、虚構性を濃厚に帯びていることは明らかである(註7)。また、蒐集趣味で大切に保管されたものほど、未使用の状態を重んじるために、絵はがきの所有者が記す情報も少ないため、なおさら年代を知ることができない。絵はがきは、その画像から得られるインパクトが強くある一方で、歴史を知るものとしては傍証資料にすぎないというジレンマがある。

絵はがきの研究面での活用は、もっぱらある個人の人物研究の素材に限定されてきた。作家や芸術家、学者、政治家などがしたためた絵はがきは、表の顔とは違う“素顔”がみえる恰好の人物研究の資料である。消印や本人が記した年月日などの情報から時期を特定し、その

人物のその年代の交友関係が明らかになるだけでなく、プライベートな文面からは人間性をうかがい知ることができる魅力的な資料なのである。

例えば、田中正明『柳田国男の絵葉書 一家族にあてた二七〇通一』(註8)では、日本民俗学の創始者のひとりとして知られる柳田国男の明治二三年から昭和二六年にわたって投函された一二六枚を紹介している。東北を旅した『雪国の春』にまとめられることになった調査旅行の過程で書かれた絵はがきや、国際連盟統治委員会委員時代の海外からの絵はがき、家族にあてた心温まる絵はがきなど、著作集にあらわれない柳田の一面を浮き彫りにしてくれる。絵はがきはこうした使われ方が中心であり、各地の文学館や記念館等では絵はがきは重要な展示物である。

2-2 近年の絵はがきを使った歴史研究

これまで歴史研究において史料として位置付けられてこなかった絵はがきであるが、近年では表象文化論の観点から再評価されはじめている。表象文化論は、主観的な感覚と客体化された認識にもとづいて営まれる「表象」を切り口に、あらゆる文化的事象が生産・流通・消費される状況やその構造を考察するものと理解である。すなわち、ある時代の人が同時代のことをどのようにとらえていたか、自らをどう他者に見せようとしたかを、視覚メディアやテキストを使って研究する文化研究である。何がどのように描かれ、それがどう受けとめられ、イメージが構築されていったか、そしてそれがいかに消費され、拡散していったか、またそのときどのような言説が支配的となり、何が抑圧されたかを検討することで、当時の社会を描き出そうとするのである。

絵はがきから“政治”を描いたものとして、貴志俊彦『満州国のビジュアル・メディア』(註9)がある。本書は、満州国がどのように自らを外部に見せようとしたのかを、絵はがき・ポスター・記念切手などを資料として明らかにした。また、ジェニファー・ワイゼ

ンフェルド『関東大震災の想像力』（註10）は、大震災が国家によってどのように描き出され、そしてメディアや人々はどのように災害イメージを膨らませていったかを、絵はがき・絵画・写真・映画・漫画・展示などを資料として明らかにした。

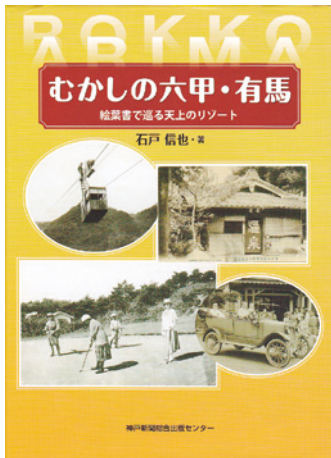
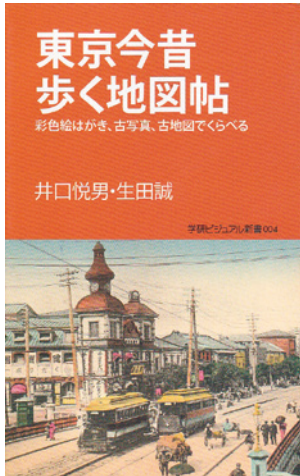
一方、絵はがきから“観光”を描いたものとして、関戸明子『近代ツーリズムと温泉』（註11）がある。本書は、余暇や休暇の誕生、交通網とメディアの発達、サービス業の隆盛などを背景に発展した近代に特有な温泉観光を、絵はがき・リーフレット・鳥瞰図などを資料として明らかにした。また、細馬宏通『絵はがきの時代』（註12）は、絵はが

きを介したイメージのやりとりを、一九世紀から第一次世界大戦までの時代に特有な現象ととらえ、絵はがきに何がどう描かれ、人々はそれをどのように使い、そのコミュニケーションによって人々は何を共有していったかを考察している。

2-3 視覚メディアによる都市景観の見直し

このように視覚メディアは、新たな位置付けのもとで研究に活用され始めている。例えば、近年出版されている絵はがき本の多くは、現代の都市に、記憶のさらに向こう側にあるようなふた昔ほど前の風景の残存を見つけ出す愉しみを提供する新しいタイプのガイドブックである（註13）。手のひらサイズの絵はがき解説本をもって、町に出ようという趣向である。また、古地図や絵はがきと現代の景観を比較しながら観光地や温泉観光地の景観をひもとく本もみられる（註14）。戦前に隆盛を極め、一時代を築いたような観光地では、絵はがきだけで当時の「情景」を復元することが可能であり、当時は有名だった場所が現





在は人も寄り付かないようなところとなっていたり、今もその風景の面影を見出せるような場所があったりと、楽しみ方もいろいろである。

こうした動きのなかで、特に過去のビジュアルな資料を使って、地域の人々の認識の変化を促し、それによって得られた新たな視点から町づく

りを考えていこうとすることを、意図的に行っている試みもある。原田健一ほか編著『懐かしさは未来とともにやってくる』（註15）である。同書によると、「映像資料は、地域社会の過去の姿を伝える貴重な文化財であると同時に、地域に対する現在のわれわれの認識を捉え直し、さらに未来の地域の進むべき方向を指し示す重量な材料にもなっていく」ものであるという。そして、絵はがきや写真に写った内容が過去を知るうえで重要なばかりでなく、それと対面しその経験を共有することが現代の私たちにとって地域の魅力再発見のための新しい視点を得ることにつながり、さらに地域のこれからを考えるうえで独特な役割を果たしうることが主張されている。

現代の人文科学は、ただ歴史や文化について思索を深めるだけでは不十分であり、その研究を社会に向けて開いていく必要がある。絵はがきを通じた思索からみえてくるものを、共有することで新しい発想が生まれ交流が生まれるような仕掛けが必要である。とりわけ風景を切り取った絵はがきは、そのビジュアルさから現代の見なれた風景に新しい魅力を発見できる。「絵はがき」を含む種々のビジュアル・メディア資料のアーカイブスの意義は、

この点に見出すことができる。

3. 負の遺産を相対化するキュレーション

3-1 キュレーションの意義

こうした新たな可能性が論じ始められた絵はがきという素材を用いたフィールドワークを、資料を独自の価値基準に基づいて蒐集・整理・分類し、独自の意味づけとまなざしにおいて提示する「キュレーション」によって進めることによって、交流の場が生み出されるのではないかと考え、筆者は実践を始めた。

前述のように、筆者らは福島県の飯坂温泉をフィールドに戦前から売春防止法が施行される前後の昭和三〇年代初期までを対象に、資料収集と調査研究、そして現地での文化創造活動に取り組んでいる。このプロジェクトの発端は、蒲倉氏の卒業論文作成過程での筆者との議論にある。それは、研究の進展によって明治～昭和初期の飯坂温泉の状況が明らかになるにつれ、現代の飯坂温泉で作成されるパンフレットやガイドブックが上記の時期を避けるかたちで記述されていることに気がつき、そのことそのものが興味深く思えてきたのである。

海鼠壁に囲まれた桜並木の色町の娼妓や貸座敷の賑わい、そして華やかさの裏にある過酷な労働と性病といった影の部分は、近年までの飯坂では語ることすら憚られるタブーであり、飯坂温泉が現代にまで持ち伝えている負の歴史である。当時の飯坂には、これと並んで芸妓の文化が花開き、様々な文化人との交わりのなかで教養を培う交流の文化も息づいていた。また、現代に遺る鉄橋や建築、発電所跡など時代の最先端の建造物と、贅を凝らした近代和風建築も、この時期のものである。加えて、摺上川沿いの奇岩や溪流、滝を歩きながらめぐる“名所”も当時の飯坂温泉の愉しみであり、近代の「自然」観の転換を読み取ることができる。正岡子規や与謝野晶子らが訪れた背景には、当時の飯坂温泉のどのような性格が潜んでいるだろうか。さらに、松島と並ぶ重要な目的地のひとつであった飯坂温泉は、近代の東北の観光や開発を考える上でも興味深い。色街をタブー視することは、同時代の魅力的な研究テーマを等閑に付すことにつながり、さらに住民自身による地域の魅力再発見のための発想を狭めることにつながっている。色街を礼賛するのではなく、かといってタブー視するのでもなく、明治後期～昭和三〇年代初頭の半世紀あまりの時代にまつわるイメージを相対化することが、いま必要なのではないだろうか。

3-2 絵はがきの展覧会とワークショップの実践

平成二三年一月八日（土）と九日（日）の二日間、秋の行楽シーズンで賑わう福島市飯坂町内の「旧堀切邸」敷地内に残る歴史的な建造物「十間蔵」を会場に、東北学院大学



「十間蔵」外観



展示の様子



「主屋」でのワークショップ



展示解説の様子



「十間蔵」でのライブ



町並みウォークの様子

博物館企画展『飯坂温泉 — 絵葉と地図でさぐる戦前のすがた —』（註16）が開催された。戦前の絵はがき約四〇枚でありし日の町並みの風景を楽しんでもらうこの企画は、飯坂絵はがきプロジェクトと東北学院大学博物館の共同企画によって実現したもので、展示資料はすべて飯坂絵はがきプロジェクトの提供による。

一月八日には、「旧堀切邸」主屋を会場にワークショップが行われ、地元の方々や学生ら四二名が参加した。筆者による「静かなブーム！ “絵はがき地元学”」と題した話題提供ののち、蒲倉氏が「大正昭和の人々が見ていた飯坂の風景」と題する講演をした。そして会場を隣接する「十間蔵」に移し、地元旅館の若旦那衆と民謡の歌手によるユニット「飯坂だゑべしたーず with 木綿子」が、飯坂小唄をはじめとする福島や飯坂ならではの楽曲を披露した。最後に、戦前の絵はがきと現代の風景を見比べながら、一時代前のおもかげを訪ねる「飯坂えはがき散歩（町並みウォーク）」で、秋の飯坂を散策した。

3-3 絵はがきと飯坂の近代

飯坂温泉では、戦前に多くの絵はがきが作られ往時の繁栄ぶりを偲ぶことができる。絵はがきに描かれているスポットは、現在の観光地とかなり異なるが、道路の拡幅改修などが少なく戦災も受けていないため、戦前の情景を思い浮かべやすい。

飯坂温泉は、戦前には東北一の色街として栄えた歴史がある。戦前の絵はがきには、飯坂電車、十綱橋、摺上川とその周辺旅館の風景、天王寺・穴原温泉、千人風呂、赤川の名所、遊郭若葉町、鯖湖湯などの外湯などがある。中でも特に多いのが十綱橋と摺上川であり、摺上ダム建設前の摺上川と船遊びの様子や、現在は残っていない木造五階建ての

旅館群などは見事な景観である。

江戸時代以来の湯治場である飯坂温泉は、明治初期の飯坂新道開削により近代の温泉地としての繁栄の道を歩み始めた。明治四一年の飯坂大火では各所に散在する遊廓を集めて移転改築させられたのだが、この場所が摺上川を東にながめる飯坂随一の絶景であったため、結果的にその遊廓街：飯坂若葉遊廓を中心に町が発展していくことになった。大正期には、当時最先端の工法で架けられた十綱橋が新たな名所となり、さらに摺上川の奇岩や滝をめぐる観光も人気を博した。さらに飯坂電車が開通して上野から鉄道で一筆書きに結ばれたことにより、東京から飯坂、仙台、松島という観光ルートが確立し、当時の鉄道局やJTBなどの旅行会社も盛んに飯坂温泉キャンペーンを打った。日中戦争頃より、飯坂温泉全体が自粛ムードになり徐々に色街としての機能が薄れた時期、昭和一九年の飯坂大火が起こる。終戦後は、進駐軍の求めに応じるかたちで再び飯坂町が色街として機能し始めるが、昭和三年売春防止法が制定され、飯坂若葉遊廓は廃止となり飯坂温泉の色街としての歴史は幕を閉じた（註17）。



絵はがき「十綱橋」



絵はがき「十綱橋上より各温泉楼を望む」



絵はがき「遊郭若葉町」



絵はがき「鯖湖温泉」

4 交流の場と飯坂の魅力再発見

戦後、飯坂温泉は一観光地として戦後の国内旅行ブームで活況を取り戻す。現在では福島市中心部からのアクセスの良さもあって、ハイシーズンには観光客が団体バスで車列をなして訪れる。現代の飯坂温泉観光は、豪商の館としての旧堀切邸と外湯鯖湖湯周辺の散策、医王寺等の寺社や旧跡めぐり、片岡鶴太郎美術庭園、飯坂明治大正ガラス美術館といった小さなミュージアム見学、フルーツラインでの果物狩り等である。実は飯坂には、近代の繁栄を物語る建造物や街路、石造物等が現存するが、観光においては近代の飯坂はほとんど紹介されることはない。

しかし、色街で栄えた時代が終焉してからすでに六〇年ほどが経過し、近代飯坂の遺産は一定の距離感をもって扱われはじめている。例えば地域のロータリークラブでは、飯坂の歴史について話題提供の催しが行われ、蒲倉氏も講演を依頼された。「十間蔵」での展示でも、会員の方々が見学に来ていただき、絵はがきに写ったものについて時間を忘れて議論が続いていた。例えば、十綱橋の絵はがきを見て、ある会員が鉄橋の十綱橋の工事の際に架けられた仮橋が水面に写っていると指摘し、その場所をめぐって議論となった。その場所はあの旅館の手前だとか、その木の脇だとか、極めてローカルな話題に筆者にはついていけなかったが、別の絵はがきはあるかとか、当時の資料に何か手がかりはないかといった質問が逆に私たちに向けられた。会員たちは、古老から聞き取り調査を行って記録をしたり、古い写真を収集したりといった活動も始めているという。また、最近オープンした飯坂温泉ケアセンターはなゆまちの男女の温泉壁面には、戦前の絵はがきを転写した陶板が設置された。

また飯坂では、店先のディスプレイに戦前の観光パンフレットを展示する店舗や旅館もある。「十間蔵」での展示のあと、ある老舗旅館の若旦那から旅館内でビジュアルな歴史の展示を企画してほしいという依頼があり、現在その旅館と周辺の温泉街の歴史について検討を始めている。飯坂には昭和前期の建物をリノベーションしたカフェや雑貨店等がいくつもあり、文化発信の拠点ともなっている。こうした店舗の店主らは、昭和初期の飯坂について新たな魅力再発見のマルシェ形式の交流イベントや、絵はがきの復刻、SNS上での色街時代のコアな話題提供などを行い、これに共鳴した外部のファンを取り込みながら活動を活発化している。明治後期～昭和三〇年代初頭の半世紀あまりの時代にまつわる飯坂温泉の正負のイメージを相対化する、さまざまな試みがこの地域では展開され始めているのである。

今回の企画は、大学博物館を主体として、地元の文化創造活動の任意団体、ロータリークラブ、観光協会との協働のなかから生まれたプロジェクトである。この企画にあたっては、地域の様々なアクターがそれぞれ抱えている課題や問題、目標とするものや評価の価値基準の多様さについて少しずつ把握していく過程でもあった。過去の飯坂温泉の様子や

生活の実際については、聞き書きの場として設定してインタビューをする以上に、仕事を進めるなかで自然な話題として出てくるのであり、さらに実現した展覧会の現場ではとめどなく対話が深まっていく。話者自身がかつとも楽しんでいるといった展示の空間が持つ独特な雰囲気は、次の活動へも引き継がれていくであろう。今回行った展覧会やイベントは、こうした旅館、飲食店やカフェ、店舗や中小企業の方々などとの交流も始めることができた。今後も、地域の人々とともに、文化創造活動を実践するとともに、絵はがきなどの視覚メディアのみならずキュレーションがうながす聞き書きや対話の可能性についても探っていきたい。

註

- 1 ここに芸術と政治の問題を見出したのはワルター・ベンヤミンである。ワルター・ベンヤミン『複製技術時代の芸術』晶文社 一九九九年を参照。
- 2 飯坂温泉の絵はがきの全体像については、蒲倉綾子「東北の「別天地」・飯坂温泉 ―飯坂絵はがきプロジェクト―」（ほろよいブックス編集部『東京府のマボロシ―失われた文化、味わい、価値感の再発見―』社会評論社 二〇一四年所収）を参照。
- 3 Peter Vergo 1989 *The New Museology*. London, Reaktion Books
- 4 Sharon Macdonald, Gordon Fyfe 1996 *Theorizing Museums*. Oxford, Blackwell
- 5 加藤幸治「市民の中の民俗博物館」岩本通弥、菅豊、中村淳『民俗学の可能性を拓く』青弓社 二〇一二年、一四一～一八四頁
- 6 加藤幸治「復興のキュレーション―被災資料を陳列して行う聞き書きの試みから」『展示学』五二号 日本展示学会学会 二〇一五年二月発行予定（印刷中）
- 7 当時の動向については、高知県立歴史民俗資料館編『絵葉書のなかの土佐―移ろいゆく時代の記憶―』（展示解説図録）同館 二〇〇八年に概説されている。
- 8 貴志俊彦『満州国のビジュアル・メディア』吉川弘文館 二〇一〇年、学習院大学史料館編『絵葉書で読み解く大正時代』彩流社 二〇一二年では、こうした視覚メディアの性格について詳述している。
- 9 田中正明『柳田国男の絵葉書―家族にあてた二七〇通―』晶文社 二〇〇五年
- 10 前掲註8 貴志 二〇一〇年
- 11 ジェニファー・ワイゼンフェルド『関東大震災の想像力』青土社 二〇一四年、原著は Jennifer Weisenfeld “Imaging Disaster: Tokyo and the Visual Culture of Japan's Great Earthquake of 1923” University of California Press 2012
- 12 関戸明子『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版 二〇〇七年
- 13 細馬宏通『絵はがきの時代』青土社 二〇〇六年
- 14 例えば、井口悦男・生田 誠『東京今昔歩く地図帖―彩色絵はがき、古写真、古地図でくらべる―』学研、原島広至『彩色絵はがき・古地図から眺める 東京今昔散歩』、広島、大阪、神戸、
- 15 石戸信也『むかしの六甲・有馬―絵葉書で巡る天井のリゾート―』、奥沢康正『眼病に効く温泉―古い絵葉書とともに辿る目の湯温泉の歴史―』思文閣出版、半澤正時編『横浜絵葉書』有隣堂、
- 16 原田健一ほか編著『懐かしさは未来とともにやってくる』学文社 二〇一三年

- 17 企画展『飯坂温泉—絵葉と地図でさぐる戦前のすがた—』 共催：東北学院大学博物館・飯坂絵はがきプロジェクト、仙台展は平成二三年七月二六日（土）～九月二五日（木）、会場：東北学院大学博物館、飯坂展は平成二三年一月八日（土）～九日（日）、会場：旧堀切邸 十間蔵（福島市飯坂町内）
- 18 長澤廣吉 『飯坂温泉四季之友』 東潤社 一八八九年、竹内久助 『岩代飯坂温泉—十綱の葉—』 私家版 一九〇二、飯塚直太郎 『飯坂湯野温泉遊覧案内』 飯坂湯野温泉案内所 一九二七年、飯坂町史跡保存会編 『飯坂の文化財』 同会 一九七七年等を参照